

運漕方等猶取調可被相伺候、  
右之通可被相觸候

〔嘉永明治年間録<sup>四</sup>〕安政二年二月薩州ニ於テ製造ノ船琉砲船江戸海ニ著ス、  
琉砲船長十五間、檣三本出し其裾黒の帆標帆三段に掛け、中程に裾黒の吹流し付、艦の方、日の丸  
並轡の紋船標小幟、布交の吹貫を立つ、

〔嘉永明治年間録<sup>六</sup>〕安政四年十二月廿五日、御國船異國形、通航浦觸停止、

公儀御船を始諸家手船等、異國形の分、通航の筋々、是迄御勘定奉行より浦觸差出候處、向後は浦  
觸不差出候間、兼て被仰出候、日本總船印、白地日の丸幟、立有之船は、御國船と相心得、港掛り等の  
節、定例廻船の通可被取計候、

〔嘉永明治年間録<sup>八</sup>〕安政六年正月二十日、大艦ノ旗標ヲ定ム、

大艦御國總標日の丸の旗相立公儀にては、中帆の柱へ白紺吹貫引揚げ、帆は中黒を用候積り、先  
年相達置候處、向後御國總印は、白地に日の丸の旗、艦綱へ引揚げ、帆は白布相用候、公儀御軍艦は、  
中黒の細旗を中帆柱へ引揚候間、諸家に於ても、大艦出來次第、家々の船印、公儀御船印に不紛様  
取調べ、雛形を以て可被相伺候、

〔徳川禁令考<sup>三十八</sup>〕萬延元年申年十一月六日

船印改正之儀ニ付御觸書

對馬守殿御渡

御勘定奉行<sup>江中略</sup>

右之通、去未年<sup>○安政六年正月二十日</sup>相觸候處、向後帆ハ白帆又ハ帆中<sup>江</sup>、其家々之印、或ハ紋附候共、不苦候、  
尤御國總印、白地日の丸之旗、艦綱<sup>江</sup>引揚候儀、先達<sup>而</sup>相觸候通可被心得候、

十一月六日